

2018年度GTセミナー 職域別見守る保育セミナー① 2019.1.21 ~ 1.22

第101号 2019年2月4日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に応えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カガヤ 奥山卓矢

職域別見守る保育セミナー

2019年1月21日～22日に職域別見守る保育セミナーが
東京都中央区のコングレスクエア日本橋にて開催しました。

全国から80名程の先生方が集まり藤森代表の講演や国信設計事務
所の国信様をお招きし「世界に見る保育環境」をテーマにご講演し
て頂きました。

また、職域別見守るセミナーの醍醐味でもある職種ごとのグループ
ディスカッション等、2日間に渡り研修を行いました。

1日目 2019年1月21日(月)

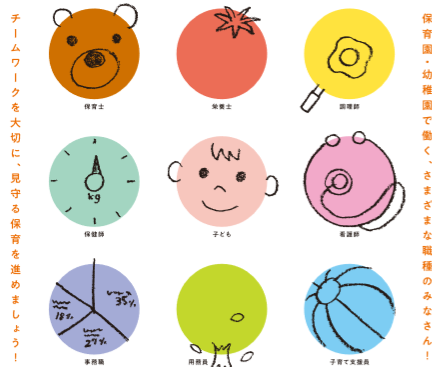
- 10:00～ 園見学
- 13:45～ 基調講演① 藤森代表 (←今回の記事はここ)
- 15:15～ 休憩
- 15:30～ 「世界に見る保育環境」国信 主馬様
- 17:15～ 意見交換会

2日目 2019年1月22日(火)

- 9:00～ グループディスカッション
- 12:00～ 昼食
- 13:00～ グループ発表
- 14:30～ まとめ

Shokukibetsu
MIMAMORU HOIKU
Seminar

GT GivingTree
株式会社カガヤ



職域別 見守る保育 セミナー

2019年1月
21日(月)、22日(火)
コングレスクエア日本橋
<http://congres-square.jp/>

●参加費 GT会員 22,000円 / GT非会員 24,000円
[申込締切] 2019年1月15日(水) 15時00分
[申込先] 株式会社カガヤ 事務局 (〒100-0001 東京都中央区新富1-1-1)

●定員 50名
●参加費 1,100円(税込)
●申込先 株式会社カガヤ 事務局 (〒100-0001 東京都中央区新富1-1-1)
<http://www.givingtree.jp>

●申込先 新張せい子ども園(東京都新富区)
<http://shingasei-kojomoen.hokuen.co/>

職域別見守る保育セミナー 基調講演

保育環境研究所ギビングツリー代表 藤森平司氏（新宿せいが子ども園 園長）

—はじめに—

皆さん、こんにちは。今日の見学お疲れ様でした。どういう感想かと思うが、子どもは大人に囲まれて見学をしてても知らん顔しているから、「慣れていきますね」と言われているが、見学者の方に、「毎日見に来られて慣れるか」と聞くが慣れないと言う。見学者が多いとストレスが溜まります。溜まらないためには、子どもたちが集中するものを用意していこうとしている。色々な人がいることをポジティブに考えて、「皆がいることが素晴らしいから来るんだよ」と子どもたちに自信を持たせようとしている。現在、いろいろな時代になってきたときに、どんなことが必要かと言うとポジティブに物事を考える人。レジリエンシー（立ち直る力）が強い人と言われています。学力が上がるのも、前向きに物事を捉える人。いつも愚痴を言ったり、後ろ向きに考えると状況は悪くなる。そうではなく、前向きにとらえること。これから話をするが、いつも保育士さんや園長など、直接保育に関係する人向けのセミナーだが、職域別セミナーはそうではない。調理や事務職の職種の人にも勉強しようということ。

—保育者として教育を考える—

現在、私は講演することが多いが大学を出て、初めて講演をしたのが小学校の事務職員に対してだった。テーマは「事務職からでも教育が出来る」をテーマに話をした。簡単に言うと、廊下に棚を買うことになった。どういうものを買うかと言うと、引き戸なのか開き戸によって、子どもの導線を計画出来ることを想定して話をした。それだけで子どもの動きを変えられる。この部屋に子どもを多く入れたかったら、開き戸にしてそれで邪魔するように入れるとか、極端な話、そういうことも出来ないことはないと話をした。それが普通の事務所と学校の事務職の違いであると話をした。導線と言う子どもの動き、人の動きの計画がある。事務所でも建物を建てる時に導線設計があるが、多くの導線設計は目的地に近い距離で行けるよう、人の導線がクロスしないように計画する。しかし、逆に保育園は人と人が出会うような設計をすることがある。それには、その園の考え方を理解していないと、どこで出会わせるかがある。セミバイキングみたいによそって、席に持って行くとしたら、食べ終わったら食器を返すときに、クロスしてぶつかってこぼしたりする。どういう流れで、どういくかを考えないといけないことがある。そういうことで事務職でも教育が出来るという話をした。何年か前に『食育』という本を出したが、今はもう絶版になっているので誰にも知られていないが実は、オレンジページから料理の本を4冊出しています。子どもクッキングが中心だが、新聞に書評が書いてあって、夏休みに使うのにいい本だと出された。私は栄養士でも調理師でもないが、そういう本を出したり『食育』の本を出した。私たちは居酒屋でコックやウェイトレスになるわけではなく、保育園の中の保育者。保育士は資格だが、そうではなく園に勤める人は保育者である。どの立場で保育をするかということで、園の理念や方針を理解していないといけない。時代の流れも理解しないといけない。時間だけでなく、園長によるかもしれないがお皿を出す。数を間違えてお皿が少ない。それがいかにもミスみたいに言うのではなくて、足りない時に子どもがどうするか。お皿が一枚足りないと言ったら、先生は「お皿の数より、子どもの数が多いのね」ということで、一対一対応で小学校の1年生で習う引き算に繋がる。一言で小学校の教育につながる可能性がある。ですから、ひたすら料理することではない。私の園で看護師さんが集まって情報交換をしているが、よく保健所や監査などで指導に来るときに不思議に思うのが、病院の看護師の対象は全員どこか怪我や病気をしている人だけを見て過ごしている。

保育園の看護師は、健常の子たちを相手にしている。健常の子たちに、病気を持った人を相手にすることを要求する。仕方ないことかもしれないが、手を拭くタオル同士が触らないようにしてくださいと指導がある。私が居なかったらだが、例えば、タオルは手を洗った後に拭くが、隣同士に触っていけないなら、手を洗う前の子ども同士は手を繋いではいけないということになる。手の方が付きますからね。子ども同士、手を繋いではいけないのかということになる。それを指導するのは、病院のタオルの感覚しか持っていない。拭くことの教育の意味はなくて、衛生が優先する。私たちはそういう中でいなきゃいけないので、仕事の中で難しいことがある。その中で何をしていきたいかを考えないと、どの職種でも教育です。時代を知ったり、どういう風に考えたらいいかを話します。参加者の中に調理関係の方が多いので調理関係の例に出します。他の職種でも、自分たちはその職種からどう工夫すれば教育になるか考えて欲しいと思います。

—人類の進化から考える—

最初に出したのは全世界で1000万部を超えている『サピエンス全史』。この本の作者が、「今現在、人類で最も重要な決断の時期です」と言っています。人間が生き残るかどうか、ちょうど過渡期に来ているのではないかと言われている。今日の日経新聞にも減びる方向と出ていた。今言われているのが500年くらいすると全滅すると言われている。それを生き延びていく過渡期だと言っている。将来どうなっているかを考えるが、どうなっているかは分からない。言えるのは、今子どもたちが学校で習っていることは、40歳になる頃には、ほとんど無意味になると言われている。そういう意味では、早く変えないと意味ない可能性がある。その時代によって変えていかないといけない。園で言えば、園がつぶれないため、人類が減びないためには一生学び続けていかないといけない。変えていかないといけない。変えることは困難で、反対者も出る。保護者や役所も反対する。信念を持って、変えていかないと子どもたちが不幸になる。最近言われている禁句は、「昔からやっていた」という言い方。昔とはいつからか。最近、私が講演で話をしていることだが、私の園が民営化を12、3年前に受けた。保護者が猛反対した。民営化する条件で、保育を変えないで欲しいと言われた。あまり言うもんだから、「分かりました、変えません。ですから、皆さんも子どもを6、7人産んでください。だったら替えません。皆さんが何で先に変えてしまうんですか、少なるならそれに合わせた保育を何で抵抗するんですか」と言った。変えるなどと言って、昔みたいにPCやスマホをしないのか。だったら変えなくていい。新しい時代に、どんどん新しいことが出てきている。私から見ると例えば、お便り帳に手書きでこだわる人が居る。確かに味があるが、時代はそうではなくなる。打った文章になる。手書きだと味があるではなく、ワードでどうやって味を出すかを考えないといけない。その時代で大事にしないといけないのは、子ども園の思いや気持ちや味があるなら、ワードを使っても、どういう風にしたら味が出るのかを考えないと、昔からしていたではダメ。GTのメルマガで送られている中で私のブログが引用されているが、子どもにはTVはよくない。戦いごっこや戦闘もするから見せない家庭がある。その子どもが戦いごっこしないかと言うとする。家で観なくても、子どもの中で学んでしまう。家で禁止するなら、他の子と接触も禁止しないといけない。そうではなく、TVの観方を教えたりしないと、ただ排除しても子どもの世界があり、付き合っているから無理。これからは変えることを止めるのではなくて、不安定な時代には人生は対応できないから、子どもたちに教えないといけない。自分たちが肝に銘じないといけない重要なことは、変化にあがなうのではなくて、変化を前向きに受け入れられるような特性、自己イメージをどう変えていくかを考えていかないとだめ。昔からしてきたとしがみついても、時代は変わっていく。私たちの世界でもそう。全く分からないと考えようがないので、他の人の研究で世界中で多様性があって、その多様性の中で共通しているものがある。ビョークランドという人が、様々な研究をしたら、この多様性の共通するものは、進化の原

則に基づく発達的なもので、これが共通だった。もう一度、進化から考えてみようとなった。これを言われる前に私も色々調べてみると、進化からどう来たのか考えるべきだと思います。まず人類はどう生存戦略をとってきたか。育児もずっとしてきた。その中で、今日の新聞で衝撃的なことが日経新聞に書かれていた。人類が減びると言うよりはまず、男性がいなくなると書かれていた。男性の染色体は女性と違う。その染色体が衰えているようで、今に男性がいなくなると言われている。そういうような時に、昔からどう生きてきたかを見直す。ホモサピエンスはどういう能力を持って、生き延びてきたのかを考えることだと思います。見学の時に話をしたが、私たちは家族や社会を作って、共感して協力して生き延びてきた。私たちはその能力を学んでいく種である。それをどこで人類は身につけてくるかと言うと、それは出産から関係する。人間は出産期が短い、二足歩行。肉食動物に食べられてしまうこともある。多くの子どもを短い期間に産まないといけない。昔は6, 7人産まないといけない。遺伝子を残すためなら2, 3人産めばいいが、死ぬ確率もあるから6, 7人産まないといけない。短い期間に産むために1年未満(9ヶ月)で離乳することにした。そして、次の年に次の子どもを産む。そうすると、他の霊長類よりも人間は未熟で9か月だと未熟です。その9か月の子を育てたかと言うと、どうして可能にしたか。出産はリスクが高い。発展途上の中では、若い女性の死亡率のトップは出産。お母さんが亡くなってしまうリスクを赤ちゃんがどう乗り越えてきたか。

—集団保育—

それは脳の進化だが、人間らしくするには脳の前頭前野です。この発達は他者への共感能力を高め、多くの仲間と共存すること。つまり社会を形成してきた。赤ちゃんは様々な大人からの思いやりから育てられ、その中で共感能力を育ててきた。そうやって生き延びてきた。人類は700万年前熱帯雨林に住んでいたが、だんだんと平原に移り住んできた。危険だが、ただ二足歩行がしやすい。中央アフリカから出て世界中に散らばり200万年位前から脳が大きくなっていった。脳が大きくなったのは、集団が大きくなったからと言われている。この頃、家族が生まれた。家族は子どもを育てる集団だが、人間の子どもの成長が遅い。他の生き物はすぐ立ったりするが、人間は遅い。家族では無理で、お父さんお母さんだけではやっていけないので集団を作った。複数の家族が集まった共同体があるからこそ、それぞれの家族も存続できる。その社会の中で、共同保育を赤ちゃんはされてきた。お母さんだけ、両親だけで育てられたわけではない。今でもサン族たちは、生まれたら村中の人に代わる代わる抱っこしてもらう。抱っこして顔を覚えなさいと覚える。大体6カ月すると顔を覚える。他の部落の人は危険で襲ってくるかもしれない。6ヶ月くらいすると部落の人の顔を覚えたとする。6ヶ月くらいになって人見知りをするのは、他の部落に気をつける、危険と言う意味で、現在はお母さん以外に泣くと人見知りと言うが、本当はそうではない。6カ月までは大丈夫な人だよと教える。だんだん孤立化している。お母さんだけになったり、子どもにお母さんは大事と言うが、集団や社会が大事と言われている。子どもは、お母さんが亡くなくても社会があれば生きていける。でも、社会が無くなったらお母さんだけでは生きていけない。人間の脳は色々な人の関わりの中で生まれ。人間関係を学習し、知識や人格を伝承していくと言われている。その中で一時期、ボルビーの愛着が話題になった。最近はどうも間違っているのではないかとされている。モノトロフィーと言う考え方は、ルーマニアの戦争で親が失った子どもたちが収容された。健康で安全で豊かな食が与えられた。でも、そこから出た子たちは皆、愛着障害になってしまった。栄養が足りて、衛生的で、いい食を与えてもなにか。それは、お母さんがいなかったからではないかと、愛着存在がなかったからではないかと、愛着と言う考え方をボルビーが出した。それが最近、もう一度事情や孤児院を調べた結果、ボルビーの考え方は間違いだと分かった。愛着障害を起こした子たちは、お母さんがいなかったからではなく、子ども集団の中で育っていなかったと分かった。孤児院はそこを出たら違う家の養子になっていく。子どものためと思って、

子ども集団をさせなかった。その後の孤児院も調べた結果、子ども集団を作っていない孤児院を出た子たちは、人生の中で困難をきたす。グループで暮らしていても、孤児院を出たら分かれるだろうとシャッフルして、仲良くさせていない。施設に居る間だけでも子ども集団を作った子たちは幸せに暮らしている。ハリスは、「どんなにいいお母さんでも、子ども集団は出来ない。しかし、仲間、子ども集団はお母さんの代わりに時としてできるのではないかと、愛着存在になりうるのではないか」と出したのが、集団社会科理論と言う考え方です。ハリスがハーバード大学の時にその理論を出したら迫害を受けた。その時代はスキナー派という、学生が勉強をしていた。スキナーが言った提案は「各生命体の行動は、その生命体のどのような報酬を与えられ、与えられなかったという教科歴を知ることで解釈できると考えました」。これは間違っているとハリスが言ったら、迫害に遭い、博士号を剥奪された。ハリスは種間に重大な違いがあると言った。欠点は、進化の過程で集団で生活設計された種は、孤立した単体に注目しても無理。ちょうど、スキナー派の学生たちがハトがどう餌をつつくかを調査した。「ハトを巣箱に入れ、つつくボタンを与え、ハトがそのボタンをつつけば時折トウモロコシの粒を与える。そうした場合にハトがどのように行動するかを研究しました。しかしハトは単独で生活するようにはつくられていません。ハトは他のハトと一緒に生活するようにつくられているのだ」とハリスは言います。ハトは他のハトと生活するようにつくられているから、つつき方は他のハトと一緒にしないといけないうるだろうと言った。人類は社会に出て、集団で生きる生き物です。これを個々に研究しているから心理学なんです。子ども単体で研究している。心理学をそのまま当てはめても無理だろう、ということですから、赤ちゃんが何が出来るかできないか、どう発達するかではなく、集団の中で赤ちゃんはどうかを研究をしないと無理。ハリスの提案は「家庭外における仲間や友人との集団関係における経験の影響が、子ども一人ひとりの個性や能力の発達により重要な意味を持っている」と提案します。

—好き嫌いの構造—

義姉が甘い赤ピーマンの収穫をしている時に、その一つを甥に与えたことがある。彼がそれを口に入れると、彼の妹も『私にも！』と主張した。すると甥はその味が気に入らず、口から出していいかと聞いてきた。すると姪はすぐさま考えを変えた。実際に味見するまでもなく、彼女は自分も甘い赤ピーマンは嫌いなのだ決めつけたのだった。親は赤ピーマンが好きでも、親の影響はそれほどでもない。彼女に重要なのは、お兄ちゃんが好きかどうかだけ。発達心理学のリンマーチという人は、就学前の子どもたちに、食べ物の好き嫌いの最も顕著に言われる年代の子どもたちは親が、いかにおだてても嫌い決めつけるものを口に入れられない。親がどう宣伝しようが、説明しようが妥協しない。就学前の子に、嫌いなものを好きと言わせるための方法はただ一つ。好きな子と一緒にテーブルに座らせ、与えることだとハリスは言います。

—社会化、性格形成、そして文化の伝承—学術研究における異なる三つの分野—

これらは皆同じ過程を経て、同じ場所、すなわち仲間集団で行われる。仲間と共有する世界こそが、子どもの行動を決定づけ、生得的な特徴に変化を加え、それゆえに彼らがどのような大人になるのかを決定づける。その仲間集団を私たちは持っていますから、好き嫌いをなくす、多く食べさせることも、子ども単体で、家でお母さんがするような料理の工夫するとかではなく、子ども集団の中で影響をさせていくことが社会です。そういうことで赤ちゃんは文化を伝承していく。

—見て、学ぶ—（ハイハイをする動画）

赤ちゃんが食べ終わって這って、向こうにいる先生が気づいてやりたいことを見つけていく。この子はエプロンをしまいに行った。この子がやれるのは、子ども同士の中で伝承されていったから。上の子がやっているのを見て先生が教え込んだわけではない。家でこういう姿にさせるのは大変、仕込まないといけない。

—「指導から援助」「援助から指導的援助」「指導的援助から応答的援助」へ—

応答的援助という言葉を考えました。遠藤先生が「情緒的利用可能性」や「集団的敏感性」と訳すが、英語の直訳で分かりにくい。特に「集団的敏感性」を去年テーマにしたがよくわからない。「二者関係敏感性」という言葉もある。子どもの反応に的確に敏感に、こちらが反応してあげましょうということに対比し、同じ英語を使っているから集団で敏感とは何？となる。「情緒的利用可能性」って、先生を利用可能とは何か？ということで、こういう言葉を作った。質の高い保育とすることで、OECDが出したイギリスの研究で温かく、応答的であること。この応答的であることに関係しているから、「応答的援助」という言葉を遣う。

—保育所保育指針の改訂—

1965年作成の保育所保育指針の保育内容を示す6領域は、小学校の教科に代わるものとして考えられ、一定の知識を教えるような行き過ぎた系統主義が横行することを招いてしまった。実は今、倉橋惣三さんの研究がもう一度されているが、立派な方で保育のこともいいことを言っているが、このあたりの時代の人で系統保育や誘導保育を提案している。それはまた、当時、受験戦争が激化する中で、井深氏における「3歳では遅すぎる」を代表として早期教育の波がおき、保育へもそれが反映されていった。歪んだ指導を是正しようと幼稚園教育要領を1989年改訂、それに準じて、翌1990年において保育指針の改定にあたって、児童中心主義へと変えていこうという動きがあった。ここでは、生活と遊びに関する項目での「指導」の文言を「援助」に置き換え、指導そのものを否定する形をとった。

行き過ぎた指導が抑圧の危険性をはらんでいったように、環境を通した援助は放任の危険性をはらんでいった。

「子どもたちは何をしてもいい」「1日中好きなことをしていればいい」と、保育者の専門性に対する混乱が生じてしまった。そして、系統主義と児童中心主義を対立的にとらえていったにもかかわらず、子どもの自発性と保育者の指導性があいまいにとらえ、現場ではなかなか児童中心、子ども主体という保育が根付かなかったのである。90年指針の特徴について「保育者中心の保育を改めて、子ども中心の保育にしよう」という意図をはっきり示した。

「子ども中心の保育とは、子どもの自発的な遊びを、保育者が援助する保育である」としたのである。

指導とは「保育者の頭で考えたことを保育者主導で子どもにやらせること」

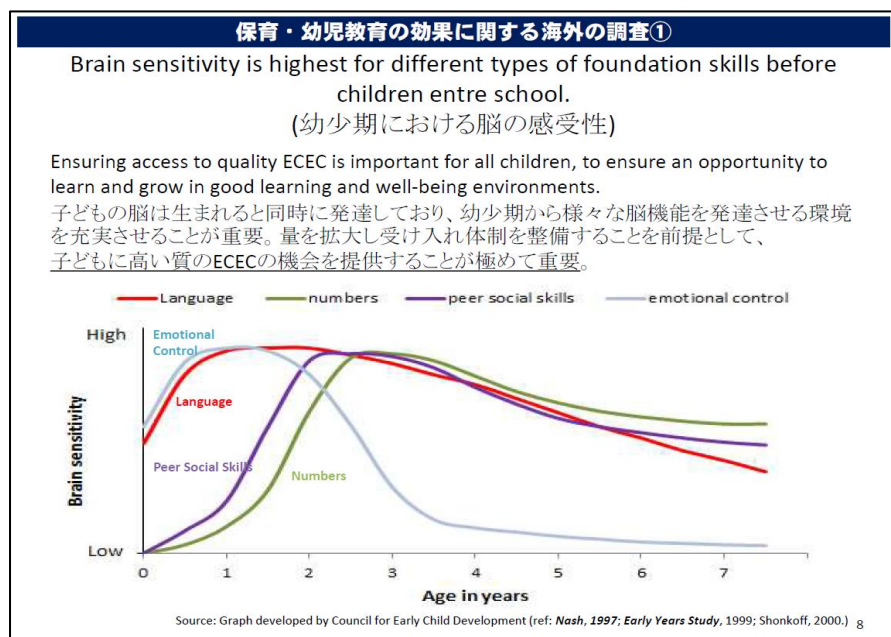
援助とは「自由遊びがさらに展開するように保育者が環境を整備すること」と説明。

世界中の保育分野から「指導」的要素が消えていった背景に、「白紙論が否定されてきた」ことがあると思われる。しかし、先回りをして援助することに慎重にならなければならないのである。また、大人が大人の価値観におけるねらいをもって援助することにも慎重であることが必要になる。このような援助を「指導的援助」とし、望ましい援助のかかわりは、「応答的援助」というかかわりをするべきであると思っている。子どもが言ったらやってあげる、援助するに変えるべきではないか。応答的援助、これがある意味で「情緒的利用可能性」という言葉ですね。日本語としておかしいが、応答的援助と言う態度でいるべきだと考えている。

—自立—（自分でできるようになるから、支え合って生きる）

使ったエプロンは袋に仕舞うが、仕舞えないので先生が仕舞います。頼みに来たら先生は仕舞います。子どもは誰でも愛着に関係なく利用しようとしています。この動画を観ることで変わったことがあります。頼みに来た時にやり方を教える先生と、すぐにやってしまう先生がいます。どちらの先生がいい先生か。私は教える先生がいい先生だと思っていたが、すぐやってあげた方がいい。すぐやってしまうと依存してしまうのではないかと思う人もいると思うが、子どもは自分で出来ることは嬉しいことだから、自分でやれるようになったら頼まない。依存するのは、頼まれないにもするからです。頼んで来るのは本人の意思なので、これが応答的援助です。しばらくすると自分で出来る子が増えてきます。自分で出来ると、先生が前を横切っても頼みません。この女の子はまだ自分で出来ません。自分で出来る子が出ると、先生にではなくて友だちに頼むようになります。先生が頼みやすいように近くにいても頼まない。友達がやるのは先生がすぐやるのを見てやるようになる。手順を教えると、一人でやるのは早く出来るようになるが、人にやってあげることにならない。すぐやってあげると、他の子にすぐやってあげようになる。頼まれたらすぐやってあげた方がいい。抱っこと言って来たら5歳でもやってあげる。大人を見て、子どもは順にやってあげるようになる。自立は社会の中で生きていくために、人と助け合うことが自立です。無人島で生きていくためではないので、社会の中で支え合って生きていきます。自立は1人で出来るようなことではありません。

—脳の感受性のグラフから見る「食育」3本柱—



図：指針改定でも使用された脳機能拡大のグラフ

注目するのがエモーションコントロール。1歳前後がピークで3以上は育たない、これが我慢する力。これが早い時期に身につきます。マシュマコ実験というものがあり、15分我慢したらもう1個あげる。食べたかったら食べていいよと言う実験。まず4歳の子にすぐ食べたいか、我慢して2個貰うかを実験していきます。44歳まで追跡調査をし、今も続いている。我慢できた子と、できなかった子を追跡した結果、健康などいろいろなことに対して全てよかったのが我慢できた子。この実験の1つは、4歳の時点で我慢出来た子と、できなかった子がいたのかと言う話。多くは子ども集団だが、もう一つは、調理からだが、都知事賞を貰った食育3本柱を提案した。最初が「栽培」。ハーブ園などがあり、野菜を育てているが、栽培には学ぶことが3つある。水を上げる責任感、日々の成長の変化に気付く注意力。自分で育てた植物だけでなく、すべての植物を大切に思いやりの心が育ちます。これらが栽培か

ら学べることだが、栽培の意味は未来への展望です。植物を栽培することで、自ら成長を確認したり、実になるまで待つことから、待ち望むようになります。他の生き物は今食べます。人間だけで、半年から将来を見て、展望を待って、食べる。これで待つ力をつけてきたのではないか。これも大事な意味です。保護者に、マシュマロ実験のように待つためには一緒に栽培したらどうですか。出来るまで楽しみに待つことが一つです。食育の3本柱の2つ目は「調理」です。調理は人間しかできない行為です。目の前で調理するとか、子ども自身がすることが重要です。それがどういう力をつけるかというと、ままごと遊びで料理の真似をすることか、子どもクッキングことによって、自分で食べる量を伝え、嫌いなものがある場合も相手に伝えて、自分で選んだ量は最後まで食べる責任感をつける。これらは人間らしい脳が育つ。火を使って調理をするが、火の素晴らしさや温かさを学んだり、待つ楽しみです。目の前で調理している姿、調理室からの香り、食事が出来上がるのを待つことで、食に意欲が湧いてきます。この中からも、待つことを学んでいきます。出来上がることを楽しみに待つということです。他の生き物は料理をしないので、すぐに食べてしまうが、即席ラーメンも3分待つ。ごはんも炊き上がるまで開けずに待つ。料理の中には、待つ体験がいっぱい入っています。3番目が「共食」です。人類は、家族や親しい人と丸くなって食事をしてきました。その中で様々な年齢の人が集まって食べていたことを、共食と呼んでいました。皆で「頂きます」をすることで、どの年齢がどう食べていたかを学んでいた。私の園でも3.4.5歳は皆で食べるが、期ごとに「共食デー」と言って、0から大人までの10人程度のグループ、大体10チーム位で丸いテーブルで、大皿を囲んで皆で「頂きます」という試みを行っています。何を学ぶかと言うと、皆で揃って食べるためには、皆が揃うまで待つことをするために待っています。私の園では、揃うまで待って、揃った楽しみを待つ。食育の3本柱は栽培、調理、共食です。栽培は収穫時期まで待つ。調理は食事が出来上がるまで待つ。共食は全員が揃うまで待つ。食育3本柱は、待つ力をつけていたのではないかと思う。3本柱はよく言われえるが、何故かと言うと、人間しかしないからと言われるが、何で大事かと言われる中で、何で大事かと言うと、全部待つことを教えていたからではないかと言われている。うちの園では3、4年前に都知事賞をもらった。調理が集団給食、都知事賞というのがあって、デパートや病院など集団給食をしているところで賞があって、都知事賞を取って調理が行ってプレゼンをしました。エモーショナルコントロールは待つことから身につけるのではないか。

—大小比較・数の理解・自分を知る—

グラフの中でナンバーズとある。数の理解は1、2歳から脳が大きくなる。午前中のおやつで、ジャム付きのパンを出しました。調理はそんな数の事と思っていませんでした。残菜が多いので、もしかしてと思って保育者が、「ジャムなしのパンも出してみて」と言った。そして、子どもたちにジャム付きと、なしのパンを子どもに選ばせるようにしました。2つ出して「どっちにする？」と聞くと、付いていない方を選んでいる。もちろん残菜がなくなる。若い男性がリーダーでやることになった時に、どっちかを選んでもらっていると、ついていないパンばかりが残った。選ばせないと思って、この男性職員はどうしたかと言うと、子どもたちに「こっちについてるほうにする？こっちについているのにする？」と選ばせてもどっちもついてるが、子どもは自分で選ぶと食べる。子どもも選んで食べるのだということで、違う日のおやつでビスケットの日があった。1枚と2枚どっちと選ばせた。これは数の理解とどれくらい食べれるかがある。子どもたちはどっちかを選ぶ。そして性格もわかる。大人でもいるが、決められない子がいる。何で悩んでいたかと言うと、1枚しか食べられないが2枚ほしいと葛藤する。先生が催促する。でも決められない、見るに見かねて背中を押す子がいる。結果的に2枚を選んで一枚を残した。今度はさつまいもの日。先生は大きいか小さいかを見せた。半分か一本だが、大きいか小さい、どっちを食べれるのかを言う大小比

較。一律に出すのではなくて、子どもに選ばせる。選べないがどっちと聞いていきます。この子はこっちと選んでいるが、この体格なので、先生がもう一度「どっち？」と聞くと、やっぱり大きい方を選んでいる。この子はお茶だけでいいと選択をしている。午前中のおやつをお腹いっぱいにする、水分補給だけでなく、ここからも保育がある。ここにも教育があり、調理をやることがある。脳の拡大のグラフで、この年齢から数を把握していくのだと理解すると、出し方を変えていく工夫も出来る。

—お手伝い保育—

お手伝い保育と言って、年長さんが012歳にお手伝いに入ることがあります。先生が意図して撮っていないと思うが、偶然だが面白い動画を観てもらいます。この子は0歳からいる子です。手掴みするのをダメと言わないで、何となく遠ざけていて、若い先生より上手な気がします。一緒に口を開けていますね。ご飯をおかず汁ものをあげています。この子はこっちと指しました。ご飯を上げようと思っていたが、子どもがこっちと指したのに気づいて、そっちをあげています。この子はこっちと指すから、これかなと思ってあげています。別の子も同じように、ご飯をあげています。だけど、子どものことを見ていません。ごはん？と聞いています。今度、汁ものをあげています。この子は汁物が欲しいと言っているのに、関係ないものをあげていると、この子は次第に意思を言わなくなります。自分で言えるようになるのは、この頃から関係してきます。私が応答的援助と言うのは、ここの違いだと思います。この子に対して、応答的にあげていかないといけない。0からいる子は分かっている。小さいうちの食事から、あげるだけでも違ってきます。私がこういうことを感じました。

—言葉掛けの重要性—

ある時、10の姿について、ある園で園内研修をした時に、一緒にいった助手が、10の姿の言葉の伝え合いで、シルエットで子どもに言葉を言わせる例を出した。行った園がちょうど、家型や人型、犬型を切り抜いてやっていました。その助手が、うちの園の極端な見本を見せたら、そこには、「信長が秀吉と本能寺の変でどうした」と言うことが書かれ、その話をした。そうしたらその園が驚いて、「うちでは、そんなことは言わない。パパが帰って来て、〇〇した。としか言わない」と言ったので、「その子の資質ですよ。」と言った、一度お楽しみ会で、お城が出てくる話が合って、お城を段ボールで先生が作って、瓦をその子が「緑で塗る」と言った。緑？と思ったら、「名古屋城と大阪城は緑だから」と言う子ですよと言ったが、よく聞いたら、その園はシルエットを与える時に、「例えば、パパが帰ってきたところ」と話を誘導していた。子どもに発想がないのではなく、大人の価値観から例を出して誘導していた。もともとの資質もあるかもしれないが、それを引き出す言葉かけで違ってきます。1歳の例に出したときに、1歳児はまず先生がシルエットを貼ります。先生が「これ、なあに？」と聞いていく。その園もそうしていた。私の園では子どもが「パパ」と言ったら、もう一言「パパが何をしてたの？」と聞くと、「パパが〇〇した」と答えていた。ちょっとした言葉かけで大きく変わってくる。食事でも、用務の面でもある。お手伝い保育をしていて、定員が増えて、012歳だけ入るとークラスが多くなる。去年から用務と調理と職員室にも年長児が来る。そこでお手伝い保育の時に来ました。彼らは用務の仕事で、職員玄関のスリッパを拭く仕事をした。年長が拭いていたら、その日保育参観で、その子のお母さんが来て、ずっとその拭いているところを見ていたらしい。それを見てお母さんは、「こういう体験は、子どもに必要ですね」と言った。スリッパを拭く、靴を磨くことはモンテッソーリの中で大事にしている。発達を促すこととしてあるんですよ。靴を拭くことも発達を促すための事だと言えどと言ったが、そう言わなくても理解したお母さんだった。一度、ボランティアさんがうちにきたときに、成人して大きい子だったが、同じようにスリッパを拭いてもらっていたら、後からお母さんから電話があって、「何でうちの子にスリッパを拭かせていた

の」と苦情を言われた。用務だろうが、調理・事務だろうが、いろいろお手伝いがあるが、全ての体験が子どもにとって学びです。保育士だけとか、運動だけが保育ではない。ですから、調理だろうが、用務だろうが保育者なんです。他の職種のレストランの調理員と違うことで、栄養だけを与える場所ではない。栄養も美味しさも大事だが、たまには焦げ付いた米を出すことも大事ですし、調理師も職員室で交代で食べたりするが、昔まずかった時がある。「今日の給食、食べたらずくない？」と言ったら、なんと言ったかと言うと、調理も「自分もそう思います」と言った。たまには、まずい経験もいいのは、レストランではないからです。色々な体験から子どもがまずいね、美味しいと体験することも保育です。

—それぞれの職種から保育を考える—

ただ事務職をすることが仕事ではない。事務をする姿を子どもが見ることも、保育に関係することをすることも大事だと思えます。色々な職種が色々な立場であることが、チームワークがいいことです。それぞれの立場からかわることが、チームワークがいいと言います。例えば、調理が保育士のように保育をするわけではありません。うちの園に調理の男性がいるが、0歳児の保育室の前を通った時に、暇？聞かれ、何ですか？と聞いたら、赤ちゃんに授乳してくれない、と言われたようで、通りかかったらみんな使われていた。調理でも授乳をしていた。彼は子どももいないですし、有利なのは、検便をしているから授乳が出来る。変なあげ方をしても、ちゃんと飲んでくれる。それを同じ人が授乳したり、同じ人がおむつを替えたほうが落ち着くでしょう、と言うことを言われるが、同じやり方ならロボットが替えればいい。食事を機械があげるような場面もあるが、私たち人間がするのは、日によって違ったり、人によって違ったり、その日の気候によって違ったり、微調整することが人間らしさ。たまには調理が入って保育することも、子どもにとっていいことです。食べる、摂取するだけではないです。昔は栄養摂取と書かれていたが、今は食への営みと書かれています。調理を特化して説明したが、同じように他の職種でも保育に関わることがあると思えます。ぜひ、そのアイデアを事務でこんなことをしてみましたとかを情報交換をして、園全体の職員が子どもを中心に、子どもにとって何がいいかを考えることが私たちの仕事だと思えます。この後の話も、容れ物を作るだけでなく、保育にどう影響していくかを保育者と一緒にやっていかないといけないことなので、そのように話を聴いてください。調理を中心に保育とどうかかわるか、時代を読んでいかないといけないかの一部を話しました。引き続き、話し合ってもらえたらと思います。最初の話はこれで終わります、ありがとうございました。

本稿は、2019年1月21日に行われた職域別見守る保育セミナーの講演内容をまとめたものです。

(文責/奥山卓矢)



〒161-0023

東京都新宿区西新宿 3-2-11 新宿三井ビルディング 2号館 10階

Tel:03-5909-7155

毎週月曜日に配信しています。

ミマモルジュメールマガジン発行：株式会社カグヤ 奥山卓矢

ミマモルジュメールマガジン



メールマガジンのご登録は、
QRコードからお願いします。